短大引越しの頃

写真は短大を引っ越す頃、97年2月に撮ったものだ。上は4階の窓から北向きに撮ったもので、図書館から正門、そして遠くに薄く「なごやドーム」が見える。その下は私の研究室があった4階の廊下であり、今も使っている書棚の上に引越し用のダンボールが積んである。隣は森正研究室であり、引越しの頃は、この廊下がダンボールで埋め尽くされた。森さんのところは、桁違いに本が多く、引越しができるか心配になったほどだ。その下の写真は研究室であり、雑然と本が並んでおり、今とあまり変わりばえしないが、やはり懐かしい。

名古屋市立女子短期大学に赴任したのは、1979年のことである。大阪市立大学の大学院博士課程3年を過ぎても、なかなか就職が決まらない中で、1月半ば頃にやっと「採用」の連絡があり、緊張気味に正門に通ったことが忘れられない。採用の「面談」でお会いしたのが、高岡實学長であった。いまは亡き先生の気さくな態度により、緊張もほぐれた。高校時代に愛用した生物の参考書の著者が先生であることを後から知った。

この短大に17年もお世話になり、名古屋市立大学に移って8年が経過する。25年、4分の1世紀という時の流れを痛感する。短大時代の思い出は、語りだせば「きり」がないが、とにかく現在の「私」をつくりあげた貴重な時期であったことだけは間違いない。とにかく、わかりやすい問題提起的な講義を心がけるようになったこと、自主性を重んじるゼミや卒論などの「指導」方法、そして教授会で積極的に発言すること、などなど短大時代の経験が大きく影響している。とくに4月から教授会の議事進行役となり、短大時代の「経験」が役立っているのが実感できる。

（7月20日　記）